

凡例

凡例の目的は本カタログの刊行の趣旨、記載内容の定義及びその趣旨を明確にするためである。そして、本カタログの刊行が原資料の学術的な価値を保全することにあることを明確にする。今回取り扱ったような歴史的な資料では通常、それにもともと附随していたデータや情報の多寡によってその資料的な価値が評価されることになる。ところがその種のデータや情報は時間の経過とともに次第に散逸、消失していき、その学術的な価値が損なわれることが例が多い。今回取り扱った資料にともなっていたデータや情報を現時点で整理し、本資料が将来、関連する専門家の手でさらに詳しく考証評価され、研究資料群として公開され利用に供されるまでの一つの準備作業であることを明確にすることにある。原資料とともに記録するデータや情報の基準を以下に要約する。

1. 本編は、国際日本文化研究センターが所蔵する銀板写真、ガラス湿板写真、ガラス乾板写真の原資料の基本台帳となるカタログである。
2. 写真の掲載は原資料に付したID 番号順である。ID 番号は写真技法に基づいた分類結果に準じており、写真カタログで通常おこなわれる写真テーマ、被写体に基づく分類・配列とは異なる。ID 番号については、銀板写真は101～、ガラス湿板写真は301～、ガラス乾板写真は501～を付した。
3. 写真の記載は原資料の整理用データシートの記載項目に準じており、「ID 番号」「資料データ」「撮影データ」「被写体データ」「注記データ」「添付データ」「備考」の順である。以下順次、それぞれの記載内容を定義する。記載内容については、基本的には東京大学史料編纂所、吉田成氏の見解に基づくが（本編第二章参照）、責任は編集者にある。
4. ID 番号は上述した基準である。
5. 資料データは原資料を特定する上で基本となる属性がまとめられている。「種別コード」は撮影の目的をおおまかに特定するためであり、被写体の分類コードである。被写体を人物、風景、風俗、建物、人工物等に分類し、検索コードとした。資料を被写体の内容や性質に準じて検索するための基本属性となるものであり、当資料の解説、考証、評価の過程を経てより適切な表記に変わるものである。「技法」は上述の通り、今回扱った資料は銀板写真、ガラス湿板写真、ガラス乾板写真の三種類である。これも本格的な検証が必要である。「寸法」は次に定義する原資料の保存形態に準じて、その長径・短径・厚さの最大値である。「形態」は原資料の現状の保存形態である。ケースに入るもの、額入りのもの、桐箱に入るもの等さまざまである。なお蓋付きの桐箱に入る資料について明らかに蓋とガラス乾板を納める桐箱本体とが一致しない例がある。蓋や本体にはしばしば注記データ、添付データがともなうために、今回は現在あるままに、おそらく受け入れ時の状態とおもわれるままにデータ化した。このように保存形態は資料の考証、評価のために慎重に調査検討される必要があり、今回は、原則として現状を忠実に保存するに留めてある。「所蔵」及び「受け入れ方法」は本資料の由来に関するデータである。
6. 撮影データは「地域」「場所」及び「撮影年月日」であるが、将来、専門家による写真解説作業をもってさらに詳細に情報化される項目である。なお比較的详细に記載されている例は、下記に述べる注記データや添付データの解説結果に基づいている。ただ、上述したように、ガラス乾板等を納めていた箱やケースに記載されるデータと写真そのものの照合はこれからの作業である。
7. 被写体データは上述の種別コードに準じておおまかに分類記載したものである。なお比較的详细なデータや情報が記載されている例は、撮影データの場合と同様に、下記に述べる注記データや添付データの解説結果に基づいている。ただ、上述したように、ガラス乾板等を納めていた箱やケースに記載されるデータと写真そのものの照合はこれからの作業である。
8. 注記データは原資料に直接由来すると考えられる一次情報である。その形態としては、原資料に直接書き込まれている場合、添付されている場合、保存ケース等に直接書き込まれている場合、刻印状のもの、スタジオの商標等である。その内容や形態が撮影者あるいは撮影を依頼した当事者によって記載されたことが窺われるものであって、写真の被写体、撮影者、撮影場所、撮影日時等を特定するために有用なデータである。繰り返すが、ガラス乾板等を納めていた箱やケースに附随する注記データと写真本体との照合はこれからの作業である。
9. 添付データとは撮影後、撮影者や撮影を依頼した当事者以外の人物によって作成され残されたと考えられるデータである。今回の資料においては、そのほとんどは原資料を入手した第三者（当資料を所有していた撮影当事者以外の第三者、古書店、古物商等）によって付加されたと考えられるデータや情報である。この場合も、添付データと写真本体との照合はこれからの作業である。

10. 備考欄には主として、今回の作業によって原資料の保管形態を改変した場合、当該資料のもともとの保管形態との関連について記述してある。今回のプロジェクトが原資料にともなうデータの散逸を防ぐとともに、資料自体の劣化を防ぎ、その恒久的な保存措置をとることにもあったために、箱詰め一括資料等については一点一点につき新たに保管する措置をとった（本編第三章参照）。このような場合、原資料がもともとどのような状態で保管されていたかを再現できる必要があり、そのために必要な元々の状態を備考欄に記載した。